

## 2022 年度大学入学共通テスト 解説〈日本史 B〉

### 第 1 問 姓と名字

小問数 6 問のうち、正誤を組み合わせる問題が 3 問、空欄補充問題、2 つの文から正誤を組み合わせる問題、年代整序問題が、それぞれ 1 題ずつ出題された。第 1 問は昨年度同様、会話文形式での出題だった。図・表や会話文の読み取りを求める問題が出題された。

#### A

問 1  正解は②。

ア 会話文では (1)「北条政子の場合、平氏の一族であり、平政子が正式な名前と考えられている」とされていること、(2)メモでは“平”が姓にカテゴライズされていること、から、「北条政子」は「苗字（名字）＋名（個人名）」であり、「姓＋名（個人名）」ではないと判断できる。

イ 明治政府は、「近代国家の国民として把握する」ために、平民にも苗字を名乗らせた。ただし、これを正文とする確信は持てない受験生が多かったはずである。ただし、明治新政府のもとでは旧公卿や大名らが華族、武士らが士族（一時的に下級武士が卒族とされた）、百姓や町人らが平民とされたため、「華族・士族・平民の身分を撤廃する」は誤りだと判断できただろう。

問 2  正解は④。

「中世のある武士」に関する問題。

X 源義仲（木曾義仲）を説明した文章であるため、b の「源」が正しく、a の「平」は誤り。抽象化された文章であるため、判断しづらいが、(1)「育った信濃国の地名で通称された」は木曾義仲、(2)「敵対する一族を都から追い落として」とは、敵対する平氏を都落ちさせたこと、(3)「従兄弟との合戦で敗死した」の「従兄弟」とは源義経（義経の兄にあたる源頼朝も義仲の従兄弟）、を指している。

Y 足利持氏を説明した文章であるため、d の「足利」が正しく、c の「新田」は誤り。「所領の地名を苗字として名乗った」のは、「新田」も「足利」も共通している（下野国足利荘、上野国新田荘が苗字の由来）。足利基氏の子孫は鎌倉公方を歴任し、「室町幕府から東国支配を任された」。しかし、足利持氏は、6 代將軍足利義教と対立して自害に追い込まれた（永享の乱，1438～1439）。

新田氏で著名なのは、南朝の武将として活躍した新田義貞であり、北朝側（室町幕府）と敵対する関係にあったことから、「室町幕府から東国支配を任された」は誤りだと判

断することもできただろう。

問3  正解は⑤。

Ⅲ 「イギリス人のウィリアム＝アダムズ」が幕府の外交・貿易顧問を務めたのは、江戸幕府の初代将軍として知られる徳川家康の時代。

1600年にオランダ船リーフデ号が豊後臼杵に漂着すると、徳川家康はこれに乗船していたオランダ人航海士ヤン＝ヨーステン（耶揚子）や、水先案内人のイギリス人ウィリアム＝アダムズ（三浦按針）を外交・貿易の顧問とした。

I 「武士の出身」の杉森信盛が、近松門左衛門と名乗ったのは、5代将軍徳川綱吉の時代を中心とする元禄文化期。

Ⅱ 「江川太郎左衛門英竜」が、伊豆韮山に反射炉を築いたのは、13代将軍徳川家定の時代。ペリー来航後の防衛策として築造されたことを把握していれば、幕末だと判断できる。

B

問4  正解は③。

a 誤文。b 正文。教科書に記されている情報によって判断すべき選択肢である。嵯峨天皇や清和天皇の時代を中心とする9世紀の弘仁・貞観文化の頃には、文芸を国家の柱として隆盛をめざす文章経国の思想が広まり、宮廷では漢文学が著しく発展した。嵯峨天皇は唐風の儀礼を受け入れて宮廷の儀式を整えるなど、唐風を重んじるとともに、文学・学問に長じた文人貴族を積極的に登用して政治に参加させた。

c 正文。「図 嵯峨天皇を中心とする略系図」からは、「(源) 信」らが確認できる（「源の姓を持ち、天皇の子どもであっても臣下となる者が現れた」は、正しい）。

皇族がその身分を離れることを、しんせきこうか 臣籍降下という。臣籍降下は古くから行われていたと考えられているが、特に平安時代になると、皇室の財政が逼迫するなかで、ひっぼく 臣籍降下が増加した。「○○宮」などと称されるように、日本の皇族には氏や苗字がなく、臣籍降下には天皇から姓を与えられるしせい 賜姓が必要となる。よく知られている賜姓は「源」や「平」であり、なかでも桓武天皇の流れを汲む桓武平氏のうち、伊勢平氏は、院政期にその勢力を伸長させていったことで知られる。

d 誤文。「正良親王（仁明天皇）」、「秀良親王」や「業良親王」というように、「親王の兄弟で同じ漢字」が使われていることは確認できるが、「秀良親王」や「業良親王」は天皇に即位していないことなどから「皇位継承の順番が明確になった」は誤りだと判断できる。

問 5  正解は①。

X 正文。「アメリカ・イギリスに宣戦布告」したのは、1941 年。太平洋戦争は、1941 年 12 月に勃発し、1945 年に終戦を迎えた。表からは、このあいだに、「勝 勇 進」など、「勝利を祈願するような名前」が優勢になったことがわかる。

Y 正文。「天皇の代替わりにもなう改元」は、1926 年に行われた（大正から昭和への改元）。表からは、改元の翌年にあたる 1927 年以降、「昭二 昭 和夫 昭三」など、「新元号の一字を冠した名前」が登場したことがわかる。

問 6  正解は①。

a 正文。「天皇は姓せいを持っておらず」は、「メモ」の「天皇は姓を持たない」から正しいと判断できる。また「メモ」の「平安時代以降、源……が代表的な姓せいとなる」とあり、「図 嵯峨天皇を中心とする略系図」から嵯峨天皇の子に「源」が確認できることから、「天皇は……それを臣下に与える存在であった」は正しいと推測できる。

b 誤文。会話文に事例としてあげられている「北条政子」とその夫である源頼朝の事例などをふまえれば、「江戸時代以前における日本の支配者層においては、夫婦同姓が原則であった」は誤りだと判断できる。

c 正文。会話文では「近世になると、百姓や町人たちも、苗字を持っていたようだよ。苗字帯刀の禁止というように、あくまでも公称が許されなかつただけなんだ」とされていた。ここから「近世の百姓・町人が基本的に苗字の公称を許されなかつたのは、武士身分との差別化を図るためと考えられる」は、正しいと推測できる。

d 誤文。会話文では「明治の民法では、女性は嫁いだ家の苗字を使うように義務付けた」とされていることから、「明治の民法が女性に嫁ぎ先の苗字を使用させた」は正しい。しかし、ポアソナードによるフランス法系民法が個人主義的で国情に適さないとされ、大幅な修正を経て、戸主権など、家父長制的な家の制度を存続させる明治民法が公布されたことをふまえれば、西洋流の「啓蒙思想の普及を図るため」は誤りだと判断できる。

## 第2問 古代の法整備と遣隋使、遣唐使

小問数5問のうち、正誤を組み合わせる問題が2問、4つの文から正文を1つ選ぶ問題、4つの文から誤文を1つ選ぶ問題、年代整序の問題がそれぞれ1問ずつ出題された。昨年度は見られなかった、年表を用いた形式の問題だった。年代整序の問題では、史料を並べ替える問題が出題された。

問1  正解は①。

- ① 「この遣隋使」である600年の遣隋使の前に「中国に使節を派遣した」のは、倭の五王の時代の5世紀であるため、「100年以上前のことだった」は正しい。
- ② 7世紀初めの飛鳥文化の頃に渡来した百済の僧観勒かんろくは暦法、高句麗の僧曇徴どんちようは彩色・紙・墨の技法を日本に伝えた（曇徴は渡来僧であるため、「曇徴が帰国して」は誤り）。
- ③ 「冠位十二階」は603年、「憲法十七条」は604年に定められたため、「この遣隋使の派遣以前に」は誤り。
- ④ 「律令」は、「大宝律令」などが8世紀以降に制定されたことが年表からも確認できるため、「新しい律令の施行を中国に宣言するために派遣された」は誤り。

問2  正解は④。

- X 8世紀の遣唐使を示しており、文化史の区分では、天平文化期にあたる。天平文化期には、「遣唐使とともに来日した唐僧」の鑑真によって、正式な戒律が伝えられた（→b）。
  - a 「唐で仏教を学んだ僧」の空海によって、「真言宗が広まった」のは、9世紀の弘仁・貞観文化期。
- Y 9世紀の遣唐使を示しており、文化史の区分では、弘仁・貞観文化期にあたる。弘仁・貞観文化期には、天台宗や真言宗など、密教が広まった。そのため、「密教の世界を構図化し、図像として描いた両界曼荼羅が作られた」（→d）は正しい。
  - c 「阿弥陀如来が迎えに来る情景を描いた来迎図が盛んに作られた」のは、浄土教が広まった10世紀以降の国風文化期。

問3  正解は④。

- a 誤文。「調・庸を納める」のは課口。史料の計帳からは、課口が1人であることがわかる（「調・庸を納めるのは5人」は誤り）。
- b 正文。史料の計帳には「去年」、「今年」と記されており、「年ごとの戸の人数の変動が分かる」は正しい。戸籍が6年ごと、計帳が毎年作成される点については、基本的な知識である。

- c 誤文。史料に「戸主の奴大伴 ……和銅七年逃」、**「婢乎売……和銅七年逃」**の表記が確認できるため、「逃亡した奴や婢は、計帳から削除されており」は誤り。
- d 正文。史料の「左下唇黒子」から、「黒子の位置が記されているのは、本人を特定するため」は正しいと判断できる。

問4 10 正解は③。

「憲法十七条・養老令・延喜式のいずれかの一部である」ことを前提とした年代整序問題。

- Ⅱ 「国司・国造，百姓に**斂**ることなかれ。国に**二**の君なし，民に**兩**の主なし」は，**7世紀初頭**に制定された**憲法十七条**の一部。国造は律令制以前の，ヤマト政権下の地方官であるため，**7世紀以前**の史料だと判断できる。
- I 「凡そ調の絹・**純**・糸・綿・布は，並びに郷土の所出に**随えよ**」は，8世紀に制定された**養老令**の一部。地方の特産物の納入を求めた令の条文だと判断できる。なお，この条文は，Ⅱの憲法十七条の条文と同様に，史料集にも掲載されている。
- Ⅲ 「凡そ諸国の調・庸の米・塩は，令条の期の後，七箇月の内に納め**訖えよ**」は，10世紀に成立した**延喜式**の一部。**式**とは律令の**施行細則**である。史料中の「令条」は，令で定められた条文を意味するため，**令**（養老令＝I）の制定→**式**（延喜式＝Ⅲ）と判断できる。

問5 11 正解は②。

大問の全体像を把握できなければ対処しにくい問題。

- ② 年表からは、「8世紀」において，**大宝律令**と**養老律令**のみが確認できる（もちろん，これらは**年表**を参考にしなくても，基本的な知識として把握しておくべき情報である）。**8世紀**には**2人以上の天皇**が即位したことを把握していれば（実際には8人が即位），「律令の編纂は，天皇の代替わりごとに行われた」は，誤りだと判断できる。
- ① 年表からは，隋や唐では，「律令格式」が同時に定められたことがわかる。これに対し，日本では，「令は，隋や唐とは異なり，律よりも先行して整備された」ことが，「飛鳥浄御原令→大宝律令」などから読み取れる。
- ③ 年表からは，**大宝律令**が**8世紀**，**弘仁格式**が**9世紀**に成立したことが確認できるため，「法典としての格式の編纂は，大宝律令の編纂から100年以上遅れた」ことが確認できる。
- ④ 年表からは，「遣唐使中止の提言」がなされたのが894年であることが確認できる。これに対し，延喜格式は**10世紀**に編纂されているため，「格式の編纂は，遣唐使が派遣されなくなった後にも行われた」は正しい。

## 第3問 中世の海と人々

小問数5問のうち、正誤を組み合わせる問題が2問、4つの文から誤文を1つ選ぶ問題、2つの文の正誤を判断する問題、年代整序の問題がそれぞれ1問ずつ出題された。第3問も会話文の形式をとる問題だった。

問1  正解は④。

- ④ 会話文では、「倭寇は、ただの海賊」とされていた。海賊が「国家権力による保護を得て」いたとは考えられないことから、誤文と判断できただろう。中国や朝鮮から倭寇の禁圧が要請されていた知識などをふまえれば、会話文を参考にしなくても誤りと判断できる。
- ① 会話文の「アジアやヨーロッパから出版文化がもたらされます」などから、「アジアやヨーロッパ諸国との交易が、新しい製品や技術をもたらした」は正しいと判断できる。
- ② 会話文の「戦国の争乱は列島各地で人・物・文化の移動を加速させました。鉄砲などの新しい軍事技術を普及させ……」などから、「戦争が新しい道具・技術の開発や導入を促した」は正しいと判断できる。
- ③ 会話文の「海上交通がより発達」などから、「大量の物資を遠隔地に運搬・輸送するための方法や技術が改良された」と類推できる。

問2  正解は⑥。

- Ⅲ 「平忠盛」が海賊鎮圧などの功績を経て、貴族としても活躍したのは、平安時代。平忠盛は平清盛の父で、瀬戸内海<sup>ただもり</sup>の海賊討伐や院への財政的援助などを行った。白河・鳥羽上皇の寵を得て昇殿を許され、殿上人となり、平氏繁栄の基礎を築いた。
- Ⅱ 「重源」が東大寺を再建したのは、鎌倉時代。源平の争乱の際、東大寺は平重衡<sup>しげひろ</sup>に興福寺とともに焼打ちされたが、その後、重源らによって再建された。
- I 「毛利輝元」に従う海上勢力が、大坂（石山）本願寺に兵糧を搬入したのは、戦国～安土桃山時代。織田信長との対立を深めていた石山本願寺の顕如<sup>けんによ</sup>は、1570年以降、各地の一向宗門徒に決起を促した（石山戦争）。信長と石山本願寺は戦争と和睦を繰り返したが、最終的には、1580年に正親町天皇の勅命による講和を顕如が飲むかたちで石山を退去し、11年にわたる対立・戦乱は終結した。このあいだの1576年、毛利輝元に従う海上勢力は、織田水軍の封鎖線を突破し、大坂（石山）本願寺に兵糧を搬入している。

問 3 14 正解は①。

教科書にも掲載されている、馬借を描いた図（出典は『石山寺縁起絵巻』）。

X 正文。Y 正文。「運送業者」とは馬借。1428 年の正長の徳政一揆は、近江坂本の馬借の蜂起から始まったことで知られる（→X、「徳政を求めて蜂起」は正しい）。馬借は、近江国の大津や坂本など、水陸交通の要衝を活動拠点としていた（→Y）。

問 4 15 正解は④。

『朝鮮王朝実録』を引用した読解問題。

a 誤文。b 正文。「日本国使、通信を以て名と為し、多く商物を齎し、銀両八万に至る。銀は宝物と雖も、民、之を衣食すべからず。実に無用たり。我国、方に綿布を以て行用し、民、皆此に頼りて生活す」から、「日本」がもたらしているのは銀で、「我国」は綿布を「行使」、つまり日本に対して輸出していることがわかる（bの「綿布は日本の輸入品で、その多くは朝鮮からもたらされて、衣類などの材料として普及した」は正しく、aの「銀……の多くは朝鮮からもたらされて」は誤り）。

c 誤文。d 正文。「利は彼に帰し、我れ其の弊を受く。甚だ不可たり。況んや倭使の銀を齎すこと、在前になき所なり。今若し質を許さば、則ち其の利の重きを榮み、後来の齎す所、必ずや此に倍せん」から、日本との貿易は日本側に利益はあるが、朝鮮側にとっては弊害があるとしていることが読み取れる（dの「未来に大きな弊害を及ぼす」は正しく、cの「未来に大きな利益をもたらす」は誤り）。

問 5 16 正解は①。

X 「和人を館主とする館の跡で、越前焼と珠洲焼の大甕に入った 37 万枚余りの銅銭が発見された」のは、北海道南部（→a）。

本州から蝦夷ヶ島（北海道）へと移住した和人は、北海道南部の各地に港や館を中心とした居住地をつくるようになった（道南十二館）。これら和人は安藤氏のもとその勢力を拡大し、道南十二館のうちの志苔館からは、37 万枚余りの中国の古銭を入れた越前焼と珠洲焼（能登）の大甕 3 個が発見されている。

b は北陸の港町である小浜を指していると思われる。

Y 「沖合の沈没船から元軍や高麗軍が使用したてつはうや矢束、刀剣、胃のほか、陶磁器や漆製品が発見された」のは、九州北部の沖合（→c）。

蒙古襲来から、場所を特定することができただろう。元の皇帝フビライは、日本を服属させようとして数回にわたり、使者を派遣した。鎌倉幕府 8 代執権北条時宗はこれを拒絶し強硬姿勢を貫いた。フビライは服属を拒否したことを理由に、日本攻撃を指示した。1274 年、元・高麗連合軍は、対馬・壱岐を経由して筑前博多に上陸した。

日本軍は元軍の集団戦法やてつほう（火薬を利用した武器）を使用した戦法に苦戦したが、元軍を退却させることに成功した（**文永の役**）。フビライは文永の役後、1270年代後半に南宋を滅ぼしたのち、**1281年**に再度日本攻撃を指示した。しかし、暴風雨によって、元軍はほぼ壊滅した（**弘安の役**）。

dは、1543年にポルトガル人を乗せた船が漂着したとされる**種子島**。

## 第4問 近世の身分と社会

小問数5問のうち、正誤を組み合わせる問題、4つの文から正文を1つ選ぶ問題、4つの文から誤文を1つ選ぶ問題、2つの文の正誤を判断する問題、年代整序の問題がそれぞれ1問ずつ出題された。特筆点として、生徒のメモが素材として使われたことや、2文正誤の問題において、複数の史料を読み取って正誤を判断する形式の問題が出題されたことがあげられる。

問1 17 正解は③。

- ③ **地借**や**借家**・**店借**は**町の運営**には参加できなかったなどといった、教科書の記述から、「町は、町内に居住する人々の総意により運営された」は誤りだと判断できる。また、**メモ**に注目し、「都市では、組織に属さない『**野非人**』と呼ばれる人々……その取締りが社会問題となった」から、「町内に居住する人々の総意」は誤りと判断することもできる。
- ① 江戸時代の農村では、**本百姓**から選ばれた**村役人**が村の運営にあたった（「村は、村役人を中心に本百姓によって運営された」は正しい）。村役人である**村方三役**は、**名主**（東北では**肝煎**、関西では**庄屋**といった）・**組頭**・**百姓代**のこと。一般的には、名主が村政を指揮し、組頭がその補佐役を担い、百姓代が名主・組頭による村政運営を監視した。
- ② 幕藩体制下では、村の**自治**を前提に、村民を掌握する仕組みが構築され、**年貢の収納**や**夫役の割り当て**は、**村**がとりまとめていた（**村請制**）。
- ④ 幕藩領主は、**町**に**町年寄**・**町名主**などの**町役人**を置き、住民を支配した人には**上**・**下水道の整備**、**堀の清掃**、**防火**・**防災**・**治安維持**など、都市機能を支えるための役割を担わせた（**町人足役**）。また、**営業税**にあたる**運上**・**冥加**を負担させた。

問2 18 正解は④。

歌舞伎の創始者→歌舞伎の名優の活躍→歌舞伎役者が浮世絵となる、というように、論理的に考えれば前後関係を判断できる。

Ⅱ 「出雲阿国（出雲の阿国）」は、**桃山文化**の頃に活躍した。



17 世紀初頭に<sup>いずものおくに</sup>出雲阿国が京都でかぶき踊りを始め、人気を集めた。阿国歌舞伎は、念仏踊りなどの芸能を広く取り入れて創始された芸能だった。

Ⅲ 「初代市川団十郎」は、元禄文化の頃に活躍した。

阿国歌舞伎から生まれた女歌舞伎は、能に加えて庶民の娯楽となったが禁止され、さらに元服前の美少年による<sup>げんぶく</sup>若衆歌舞伎も 1652 年に禁止された。こうして、成人男性のみによって演じられる<sup>やろう</sup>野郎歌舞伎が定着した。

元禄文化の頃には、(1)江戸において勇壮な演技である<sup>あらごと</sup>荒事で好評を得た初代<sup>いちかわだん</sup>市川団十郎、(2)上方において恋愛劇である<sup>わごと</sup>和事を得意とする初代<sup>さかたとうじゅうろう</sup>坂田藤十郎、(3)女形の典型とされる<sup>よしざわ</sup>芳沢あやめ、らの名優が現れた。

I 「東洲斎写楽」は、宝暦・天明期の文化の頃に活躍した。

<sup>とうしゅうさいしやく</sup>東洲斎写楽は、18 世紀末に活躍した江戸の浮世絵師で、<sup>やくしやく</sup>役者絵や相撲絵などを描いた。代表作『<sup>いちかわえびぞう</sup>市川鯉蔵』は、上半身を大きく描く<sup>おおくびえ</sup>大首絵の手法で表現されている。

問 3  19 正解は②。

X 正文。「今日一千余人相談のため、石御堂に相集まり<sup>まか</sup>罷りあり候。十五以上六十以下の男子、取り急ぎ<sup>まか</sup>罷り越し、帳面に名を記すべし」から「一揆」を類推することができる。「もし不承知の村は、一千人の者ども押し寄せ、家々残らず打ち崩し申すべし、もし遅参の村は、真っ先に庄屋を打ち砕き候趣、申し次ぎにて言い送りける」とあることから、「一揆に加わらない村へ制裁を加えるとしている」は正しい。出典の『鴨の騒立』は、1836（天保 7）年の、三河の加茂一揆を扱った史料。同一揆は、同年の甲斐の郡内騒動とともに、天保の飢饉を背景とした<sup>まか</sup>世直し一揆として知られる。

Y 誤文。「天明七丁未年五月（中略）、こわしたる<sup>あと</sup>跡を見たるに、破りたる米俵、家の前に散乱し、米ここかしこに山をなす」から、天明の打ちこわしについて記した史料だと判断できる（「世直し一揆について述べている」は誤り）。天明年間には 18 世紀後半、「世直し一揆」は 19 世紀に起こった一揆であることから、容易に判断できたと思われる。

1782 年からの冷害に、浅間山の噴火が加わり、天明の飢饉の被害は拡大した。百姓一揆が全国で頻発するなか、1786 年、老中<sup>いへはる</sup>田沼意次は 10 代将軍徳川家治の死後、まもなく老中を罷免された。翌 1787 年には主要都市で天明の打ちこわしが起こり、11 代将軍<sup>いえなり</sup>徳川家斉のもとで老中松平定信が寛政の改革に着手した。

問 4  20 正解は④。

a 誤文。「御当地場末の町家に住居候其日稼ぎの者ども、<sup>その</sup>給続けも相成り兼ね、其上店<sup>たな</sup>賃等相払い候儀も致し難く、余儀なく店仕舞い無宿に成り、野非人同様物貰い致し居り候者も多分これある由」とあるように、「江戸の場末の町家」にかつて居住していた者は、家賃を払えず無宿となり、野非人のように物乞いするようになったとされており、

「町家」に住めなくなって物乞いをするようになったため、「江戸の場末の町家には、物乞いをするその日稼ぎの人々が多数住んでいた」は誤り。

- b 正文。「御当地非人頭ども、日々（中略）狩り込み、手下に致し候ても〔捕まえて、非人頭の配下に置くこと〕」とされているため、「幕府には、江戸の非人組織を通じて、無宿となった人々を捕まえ、野非人を減らそうとする意図があった」は正しい。

ただし、「働き方難儀につき居付き申さず、立ち出、元の如く野非人に打ち交り居り候ゆえ、野非人ども多く相成り候」とされているように、非人頭の配下に置いて組織させようとしても、期待通りの働きをすることができずに立ち去ってしまい、元のよう野非人となってしまうことが多かったことが読み取れる。

- c 誤文。史料は「1836 年」の天保期のもの。「石川島に人足寄場を新設」したのは 18 世紀後半の、寛政の改革においてである。
- d 正文。水野忠邦のもとで推進された天保の改革（1841～1843）の一環として、1843 年に人返しの法（人返し令）が出された。

問 5  正解は①。

- ① 将軍と主従関係を結んだ知行高 1 万石以上の武士である大名に対し、旗本・御家人は、将軍直属の家臣（直参<sup>じきさん</sup>）で知行高 1 万石未満の者を指した。そのうち旗本は将軍に拝謁できたが、御家人はそれを許されなかった（「将軍に拝謁できる者とできない者など、武士身分の中にも区別が見られた」は正しい）。メモには、「将軍や大名・旗本などの武士」とされており、これをヒントにすべきだった。
- ② 「大工や鋳物師などの職人」が、村々にも居住していたことは、多くの教科書に記されている情報である（「村への居住を禁じられ、町に住むことが強制されていたと考えられる」は誤り）。
- ③ 近世の百姓が、農業を中心に、林業・漁業などに従事したことも、教科書に記されている情報である（「農業に従事する人々であり、林業や漁業に携わることはなかった」は誤り）。農民＝百姓ではないことを確認しておこう。
- ④ 牛馬の死体処理や皮革製造に従事する、「えた」などと呼ばれた人々が、農業や商業、手工業など、多様な活動を展開していたことも、教科書に記されている（「農業や商業に携わることはなかった」は誤り）。

## 第5問 幕末・明治期の日本とハワイ

小問数4問のうち、正誤を組み合わせる問題が2問、2つの文の正誤を判断する問題と年代整序問題が、それぞれ1問ずつ出題された。昨年度の共通テスト日本史B第5問は、人物をテーマとした問題だったが、今年度は会話文の形式がとられた。第5問でも、複数の史料を読み取って正誤を判断する形式の問題が出題された。

問1 22 正解は①。

X 「江戸幕府は、オランダ人の教官を招いて、この地で海軍伝習を始めた」の「この地」とは、長崎（→a）。

1853年、浦賀（→b）沖に現れた、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーは、江戸幕府に開国を迫った。軍事力強化の必要性を認識した幕府は、数年後に長崎に海軍伝習所を開設した。

Y 「幕末に来日したアメリカ人宣教師のこの人物は、和英辞典を作成するなど、日本の英語教育にも影響を与えた」の「この人物」とは、ヘボン（→c）。

ヘボンは、1859年に来日したアメリカ人宣教師・医師である。1867年に日本初の和英辞典『和英語林集成』を出版した。またヘボン式ローマ字を考案した。

ベルツは1876年にドイツから招かれた内科医で、東京大学などで内科などを講義した。『ベルツの日記』は、明治時代の貴重な研究史料とされている。

問2 23 正解は④。

a 誤文。「滞在・居住・商売したりすることができる」としているのは、「他国の臣民と交易するを許せる<sup>すべ</sup>総ての場所」であり、「両国の国民が相手国の国内を場所の制限なく往来」することは定められていないため誤り。

b 正文。「他国の臣民に已に許せし、<sup>ある</sup>或いは此の後許さんとする別段の免許は、<sup>いず</sup>何れの<sup>かど</sup>廉にても、他国へ一般に許容するものは両国の臣民にも同様推及<sup>すいきゅう</sup>すべし」とされているため、「通商に関して他国の国民に認めたことを、日本とハワイ両国の国民にも適用する」は正しい。

c 誤文。「この条約と同じ年」とは、下線部にあるように「1871年」。「台湾での琉球漂流民殺害事件の賠償金の規定」が含まれていたのは、1874年、台湾出兵のあとに締結された日清<sup>こかんじょうかん</sup>互換<sup>ごかんじょうかん</sup>條款（「日清修好条規には、台湾での琉球漂流民殺害事件の賠償金の規定が含まれた」は誤り）。

d 正文。1871年、領事裁判権や協定関税を相互に承認した対等条約である、日清修好条規が締結された（「相互の領事裁判権を認めるなど、対等な条約内容であった」は正しい）。清に対して欧米列強並みの立場を確保することをめざしていた日本は、対等であることに不満だったが、1873年に批准した。

問 3 24 正解は②。

I 「日本と清国との条約により、両国の朝鮮からの撤兵が定められた」のは、1885 年。

1882 年の壬午軍乱（壬午事変）ののち、日本から離れ、清国への依存を始めた閔氏政権に対して、金玉均らを中心とした独立党は、清仏戦争での清国敗北を機にクーデタを試みたが、朝鮮に駐留する清国の兵によって、ただちに鎮圧された（甲申事変〔甲申政変〕）。

この事変によって緊迫した日清関係を調整するために、1885 年、日本と清国のあいだで天津条約が締結された。天津条約は、両国の朝鮮からの撤兵や、今後の出兵時には互いに事前通告することなどを定めた条約だった。甲申事変によって独立党の勢力が一扫されると、朝鮮における日本の発言力は急速に弱まり、逆に清の朝鮮への影響力は強まった。

III 「朝鮮の地方官が大豆などの輸出を禁じたことに対し、日本政府が朝鮮に損害賠償を求めた」のは、1890 年代。

天津条約の締結後、日本は、清の軍事力を背景に、日本の経済進出に抵抗する朝鮮政府との対立を強めた。1889 年から翌年にかけて、朝鮮の地方官は、大豆などの穀物輸出を禁じる措置をとった。日本政府は防穀令と呼ばれるこの法令を廃止させ、禁輸中の損害賠償を要求し、1893 年、最後通牒を突きつけて、要求を実現した。この一連の事件は、防穀令事件と呼ばれる。

II 「日本とイギリスとの間で、領事裁判権の撤廃などを定めた条約が調印された」のは、1894 年。

日清戦争開戦直前の 1894 年 7 月、陸奥宗光外相（第 2 次伊藤博文内閣）のもとで、領事裁判権の撤廃・関税自主権の一部回復・片務的だった最恵国待遇の双務化をおもな内容とする日英通商航海条約が締結された。

問 4 25 正解は③。

X 誤文。「我が農民を送り、欧米式農業法を実習」とあるため、「ハワイに欧米式農業の技術を伝え」は誤り。

Y 正文。「労働出稼者の増加するは（中略）内国に於ては労働者賃金の薄利なるのみならず、世上一般事業の不振なるに従ひ、労働者就業の困難に迫らるるに依るもの、蓋し多きに在らん」とされているため、「日本での賃金の低さや不況により生活苦に陥っていた人が少なくなかった」は正しい。

## 第6問 鉄道の歴史とその役割

小問数7問のうち、正誤を組み合わせる問題が2問、空欄補充問題、年代整序の問題、2つの文の正誤を判断する問題、4つの文から正文を選ぶ問題、4つの文から誤文を選ぶ問題がそれぞれ1問出題された。正誤を組み合わせる問題のうち、1問は写真を用いたものだった。史料や表から読み取る問題が計3題出題された。小問7問中、半分程度は史料・表・写真の判断を求める問題となっており、瞬間的に判断できる設問は少なく、ある程度の時間が必要だったと思われる。

問1  正解は③。

ア 「開港以来の主要輸出品」は、生糸。

1858年、日米修好通商条約をはじめ、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとも通商条約が締結され（安政の五カ国条約）、条約調印の翌1859年、横浜・長崎・箱館を貿易港として貿易が開始された。

最大の貿易港となったのは横浜で、最大の貿易相手国はイギリスだった。1861年から南北戦争が始まったため、アメリカはアジア貿易からの後退を余儀なくされた。最大の輸出品は生糸であり、原料不足となった絹織物業は一時的に打撃を受けた。輸入品の中心は毛織物や綿織物で、特に安価な綿製品が国内に流入したことにより、国内の綿作や綿織物業は大打撃を受けた。

イ 「産業革命のエネルギー源」は、石炭。第二次世界大戦後には、石炭から石油へと主要エネルギーが転換した（エネルギー革命）。

問2  正解は②。

a 正文。b 誤文。1872年の「新橋－横浜間の9月」の時刻表に対し、「改暦を定めた詔書」は、史料から11月9日に出されたことが読み取れる。また、「分刻み」であることも読み取れるため、aの「史料のような分刻みの時刻表は、太陽暦が採用される前から作られていた」は正しい（「史料の時刻表が出された当時は、太陽暦が採用されていた」は誤り）。なお、いくつかの教科書には、旧暦による1872年12月3日が、太陽暦による1873年1月1日とされたことが記されている。

c 誤文。電車が開通したのは1890年代で、1870年代は蒸気機関車だったため、動力源は電気ではなく蒸気力である。

d 正文。「乗車を欲する者は、遅くとも表示の時刻より十分前に『ステーション』に来て、切符を買うこと」、「発車時限を遅らせないため時限の三分前に『ステーション』の戸を閉める」とあるため、「乗客に対して規律ある行動を求めることで、定時での運行を厳守しようとしていた」は正しい。

問 3 28 正解は①。

- ① 官営鉄道は 1877 年に大阪・京都間が開通したものの、西南戦争の軍費などによる政府の財政難や政治の不安定によって鉄道敷設事業は停滞した。その後、東京・京都間のルートをも、中山道線から東海道線へ変更し、ようやく 1889 年に東京・神戸間の東海道線を全通させた。

しかし、1886 年から 1889 年にかけて会社設立ブームが起こり、この 1889 年には、営業キロ数で民営鉄道が官営鉄道を上回った。

鉄道・紡績部門を中心とする会社設立ブームのうち、鉄道会社の設立に刺激を与えたのは、1881 年、岩倉具視ら華族の出資により設立された、日本最初の私鉄会社である日本鉄道会社だった。したがって、日本鉄道会社は「官営事業の払下げを受けた」は誤りで、「1890 年に民営鉄道の旅客輸送と営業距離が、国鉄の旅客輸送と営業距離を追い越した主な要因」は、鉄道部門などを中心とする会社設立ブームによるものだった。

- ② 表 1 からは、「1900 年から 1910 年にかけて、国鉄の旅客輸送と営業距離が増加」したことが確認できる。「民営鉄道の旅客輸送と営業距離が減少した」ことが確認できる。こうした現象は、「鉄道の国有化政策」を要因とするものだった。

日清・日露両戦争後には国力の増進と軍事的な要請から全国の幹線鉄道の統一が進んだ。1906 年には鉄道国有法が公布され、翌年までに全国の主要民鉄 17 社が買収・国有化され、国鉄路線網の営業路線は全体で約 90% に達した。

- ③ 表 1 からは、「1910 年から 1930 年にかけて、民営鉄道の旅客輸送が増加した」ことが確認できる。

小林一三こばやしいちぞうが設立した箕面有馬電気軌道みのおありまでんききどう（1918 年、阪神急行電鉄と改称）が乗客の増加をはかるために沿線で住宅地開発を進めたように、都心や郊外電車のターミナル周辺が開発された（「1910 年から 1930 年にかけて、民営鉄道の旅客輸送が増加した要因として、大都市と郊外を結ぶ鉄道の発達や沿線開発の進展が挙げられる」は正しい）。

- ④ 表 1 からは、「1920 年から 1930 年にかけて、国鉄の営業距離が増加した」ことが確認できる。

大正期の 1920 年、鉄道院を廃止して鉄道省が設置された。当時の原敬内閣は、積極的な財政支出によって地方への利益誘導を行い、政権基盤を拡大していこうとする立憲政友会の積極政策の方針にもとづき、(1) 教育の改善・整備、(2) 交通通信の整備拡充、(3) 産業および通商貿易の振興、(4) 国防の充実、の四大政綱を掲げて政策を進めた。鉄道の敷設によって立憲政友会の基盤を拡大しようとするその手法は、「我田引鉄」がでんいんてつなどといわれた（「1920 年から 1930 年にかけて、国鉄の営業距離が増加したきっかけの一つとして、立憲政友会内閣による鉄道の拡大政策が挙げられる」は正しい）。

問4 29 正解は④。

II 「南満州鉄道株式会社が設立された」のは、1906年。

南満州鉄道株式会社（満鉄）は、1906年に設立された半官半民の国策会社で、初代満鉄総裁には後藤新平が就任した。ポーツマス条約にもとづいて、清国の承認を経てロシアから獲得した長春－旅順間の旧東清鉄道とその付随利権（撫順炭鉱・煙台炭鉱など）の経営にあたった。

III 「段祺瑞政権に対して、鉄道建設にも関わる巨額の経済借款を与えた」のは、1917年。

第一次世界大戦への参戦を決定した第2次大隈重信内閣につづく寺内正毅内閣も、積極的に大陸進出政策を展開した。中国に対しては、袁世凱の後継者である段祺瑞に多額の資金援助（借款）を与え、中国における日本の影響力を広げようとした。なお、この資金援助は寺内首相の意向を受けた西原亀三が進めたため、西原借款と呼ばれる。

I 「奉天郊外において、張作霖が乗っていた列車が爆破された」のは、1928年。

満州軍閥張作霖が、国民革命軍による北伐に対抗できずに劣勢になるなか、関東軍は張作霖を排し、満州を直接支配しようとした。1928年6月、関東軍は政府に計画を伝えず、独断で列車を奉天郊外で爆破し、張作霖を殺害した（張作霖爆殺事件）。当時、この事件は満州某重大事件と呼ばれ、この事件の真相は隠されていた。事後処理にまぎらした田中義一内閣は、昭和天皇の不興を買って、総辞職した。

問5 30 正解は②。

「戦後10年（1945～55年）の間に撮影された写真」に関する問題。

X 教科書にも掲載されている買い出しの写真。

日中戦争・太平洋戦争期に整備された食料や生活必需品の配給制は、敗戦後も実施された。しかし、1945年には記録的な凶作となり、米の配給はサツマイモやトウモロコシの代用食にかえられた。この代用食の配給も遅配や欠配が続いたため、都市の人びとは農村への買い出しや闇市で飢えをしのいだ（→a、「深刻な食料不足の影響で、都市から農村へ買い出しに行く人が多くなったことを示している」は正しい）。

b 「恐慌」と呼ばれる経済状態は、1920～1930年代にかけて発生した。1930年に発生した昭和恐慌では、失業者が増大し、「都市から農村に戻る人」が増加した。

Y 「松川駅付近」から、松川事件を撮影した写真だと判断できる。

1949年には、ドッジ＝ラインのもとでインフレは収束したものの、日本経済は安定恐慌と呼ばれる深刻な不況に陥った。経済状況が急速に悪化し、企業の倒産や失業者が増大し、社会不安が増大していた1949年夏、国鉄（現在のJR）沿線で3件もの怪事件が発生した（下山・三鷹・松川事件）。下山事件では、7月6日に下山定期初代国鉄総裁が常磐線綾瀬駅付近（東京都）で轢死体（列車などにひかれた死体）となって

発見された。7月15日に起こった三鷹事件では、中央線三鷹駅（東京都）で無人電車が暴走して6人が死亡し、約20人が重軽傷を負った。さらに8月17日、東北本線松川駅付近（福島県）でレールが外されるなどの進行妨害により列車が転覆し、機関車乗務員3人が死亡する松川事件が発生した（→d、「企業の倒産や失業者の増大が社会不安となっていた時期の事件を示している」）。

c 「平均して前年比10%ほどの伸び率で、日本経済が急成長していた」高度経済成長期は、一般的に1955～73年とされる。

問6  正解は④。

- ④ 表2からは、1964年に東京－新大阪間の東海道新幹線が開通したあと、1982年に東北新幹線・上越新幹線が開通したことを確認できる（「表2によれば、太平洋ベルト地帯から整備された新幹線は、その後、東北地方や日本海側と首都圏を結ぶようになった」は正しい）。
- ① 表2からは、旅客輸送は、1975年に「323,800（百万人キロ）」だったが、1980年には「314,542（百万人キロ）」に減少していることを確認できる（「表2によれば、鉄道の旅客輸送が減少したことはなかった」は誤り）。
- ② 「日本で最初に開かれたオリンピック」は、1964年の東京オリンピック。表2からは、「東京－大阪間」の東海道新幹線は、オリンピックが開催された1964年に開通したことが確認できるが、「東京－大阪間」の高速道路である名神高速道路・東名高速道路の全線開通は、それぞれ1965年・1969年であるため、「日本で最初に開かれたオリンピックの開催までに、東京－大阪間には、新幹線・高速道路が全線開通した」は誤り。
- ③ 「第1次石油危機」は、1973年。自動車の旅客輸送は、1975年に「360,868（百万人キロ）」、1980年に「431,669（百万人キロ）」、1985年に「489,260（百万人キロ）」というように、増加しているため、「表2によれば、第1次石油危機の後、自動車の旅客輸送は減少した」は誤り。



問7 32 正解は②。

X 正文。1982年11月に成立した中曽根康弘内閣は、「戦後政治の総決算」をスローガンに掲げて、内政では行財政改革や防衛費の増額を実施した。新自由主義の世界的潮流のなか、老人医療や年金などの社会保障を後退させて、1985年に電電公社（現、NTT）と専売公社（現、JT）、1987年に国鉄（現、JR）の民営化を実施した。

Y 誤文。中曽根内閣時には「国鉄の民営化」、小泉純一郎内閣時には郵政民営化が実現した（「国鉄の民営化は、小泉純一郎が首相の時に行われた」は誤り）。

2001年、構造改革を掲げて、自由民主党総裁の小泉純一郎が内閣を組織した。小泉内閣時の政策や出来事として、(1) アメリカで起こった同時多発テロを受けて、テロ対策特別措置法を公布したこと（2001）、(2) 首相みずからが朝鮮民主主義人民共和国を訪問して金正日（金正日）総書記と会見し、日朝平壤宣言を発表したこと（2002）、(3) 2003年3月のイラク戦争開戦を経てイラク復興支援特別措置法を公布したこと（2003.7）、(4) 郵政民営化法を公布したこと（2005）、などがあげられる。